

# 研究所だより

第441号  
2022年 3月22日  
発行：土佐清水市教育研究所  
TEL 82-3015

“ 白い光の中に 山並みは萌えて 遥かな空の果てまでも 君は飛び立つ  
限りなく青い空に 心ふるわせ 自由を駆ける鳥よ ふり返ることもせず  
勇気を翼にこめて希望の風に乗れ この広い大空に夢をたくして ”

## 『旅立ちの日に』

1991年（平成3年）埼玉県秩父市立影森中学校の教員によって作られた合唱曲  
〔作詞：小嶋 登（校長） 作曲：坂本浩美（音楽教諭）〕



～希望に満ちた春がやって来ました！～

“光陰矢のごとし” 過ぎ去ってみれば1年は本当に早いですね。

2021年度も新型コロナウイルス感染症は終息することなく、更に感染力の強い変異株の出現などの影響で、1年を通して基本的な感染対策（マスクの着用、手洗い・うがい、三密回避、ソーシャルディスタンスの確保、換気など）を強いられるなか、授業の工夫や行事等を見直しながら取り組んできた日々だったのではないのでしょうか。今までに経験したことがない状況下での学校経営、学級経営、教科経営等、本当にご苦労様でした。

この春をもって退職される先生方、長い教職員生活の中で多くの子どもたちを育てられてきたことでしょう。4月から自由人となる人や新たな道に進む人など、各々が第二の人生を歩んで行くだらうと思います。しかし、何をするにしても健康が一番です。これからは健康に留意しながら趣味などを生かした第二の人生を謳歌してください。益々のご活躍とご健勝を心からお祈りいたします。

現任校を離れ新しい職場へ赴かれる先生方、在任中は子どもたちのために、また清水の教育の発展・向上のためにご尽力を賜りまして、本当にありがとうございました。先生方が残された教育実践を財産とし継承していきたいと思っております。新任地でのご活躍をご期待しています。

引き続き清水市内小中学校に在職される先生方、この1年間、様々な事柄があったことでしょう。次年度につながる成果や課題も明らかになったことと思っております。実践を積み重ねてきた中での成果と課題です。それらを生かしながら清水の子どもたちのためにご尽力していただけることを期待しています。

## 「叱る」ときこそ、心掛けること

岸川 央 氏  
（福岡教育大学・九州栄養福祉大学 非常勤講師）



「叱咤激励」という言葉をよく耳にします。「叱咤」とは、大きな声で叱り励ますこと。「激励」は文字通り相手を励ますことです。また、「鼓舞」（励まし奮い立たせる）という言葉に置き換えることもできます。要するに、「叱咤激励」は、「ただ叱るだけではなく、子どもの成長を強く願い応援する気持ち」を表します。叱り励ますことで元気づけ、やる気を起こさせるためのものです。しかし、言い方により、子どもが励まされたと受け取っていない場合は、逆効果です。

ほめられて気分を害する子どもはほとんどいませんが、叱られたことで、教師との関係がギクシャクしたり、それ以降の指導がうまく入らなくなることがあります。そのため、私も教職に就いているとき、叱る際は、最後に、その子どもの良いところをほめ、締めくくるように努めてきました。例えば、①「叱る」→「ほめる」…「今日の試合はシュートミスが多かったな。でも、前の試合より積極的になって動きはとても良かったよ」。②「ほめる」→「叱る」→「ほめる」…「理科実験では、回路図は丁寧に描けていたけど、残念なことに電流値や抵抗値の計算ミスが多かったね。実力があるんだからあわてず慎重に計算するとできるはずだよ」。子どもにとっては、叱られたのですが、「ほめる」ことを組み合わせることで効果的に働きます。「先生は自分のことを信じてくれている」「今後は同じ過ちを繰り返さないようにしましょう」など、反省とともに指導を素直に受け入れ、前向きな気持ちになるよう導きたいものです。



エリック・バーン博士（カナダの精神科医）が提唱した研究の中に、『ストローク理論』があります。これは、「他者の存在を認識する行動や働きかけ」という意味で、肯定的（プラス）ストロークと否定的（マイナス）ストロークに分類されます。博士は、「人はストロークを得るために生きている」とも言っています。要するに、我々は人間関係づくりの多くの場で、ストロークをたえず行っているということです。

さらにストロークには、条件付きストローク（相手の行為・行動に対して与えられるストローク）と無条件ストローク（相手の人格や存在に対し与えられるストローク）の2つの重要な概念があり、肯定・否定×条件付き・無条件の4種類に分類されます。例えば、「宿題をしてきたからほめる」「バスケットボールの試合でシュートが決まったからほめる」などの条件を達成しなければほめられない場合、子どもは常に条件ばかりが気になり、できなかった自分はダメなんだとなります。また、子どもは肯定的なストロークを与えられないと、服装違反をしたり言葉遣いが乱暴になったりと目立つ行為に走り、否定的ストロークでもよいから大人に関わってもらおうとします。前回の「叱る」ときのポイントでも述べたように、「ほめる」と同様「叱る」も愛情が伝わるものでなければならぬという意味で、肯定的ストロークにあたります。否定的（マイナス）ストロークは控え、肯定的（プラス）ストロークで接することが重要です。

最近、小・中学校訪問で、校長や生徒指導担当者から、「I（アイ）・メッセージ」（トーマス・ゴードン博士の書籍『親業』より）のキーワードを耳にすることが増えてきました。

その際、心に響く指導のあり方として、「You（ユー）・メッセージ」ではなく、「I（アイ）・メッセージ」が有効だと語ってくれます。例えば、「君は、掃除時間におしゃべりしていつもサボってばかりじゃないか（ユー・メッセージ）」ではなく、「私は、掃除に一生懸命取り組む君の姿を見たいな（アイ・メッセージ）」のように私を主語にして想いを伝える方が、子どもの心に響きプラスの変化が見られるようになります。「無条件の肯定的（プラス）ストローク」と「I（アイ）・メッセージ」を意識した指導を心がけるようにしたいものです。



## 「ふりかえり」から「来年度」に向けた計画を

### ～ 不登校予防・支援のための年間計画の作成について ～

不登校に対する取組は、次の3点を同時に進めていくことが必要です。

- ①再登校 ②安定登校 ③予防・早期対応

この中でも、特に大切な取組は、③の予防・早期対応であるということもありません。予防の中心は、学級経営であり、毎日毎時間のよく分かる楽しい授業です。早期対応の中心は、日常観察・面接・検査等による取組です。特に、学校3大ストレスと呼ばれる「①友人との関係、②学習の定着、③先生との関係」をどのように向上させていくのかが大きな鍵を握っています。

#### 1 3月末までにしておくこと

##### (1) 子どもとの信頼関係をつくるチャンスです

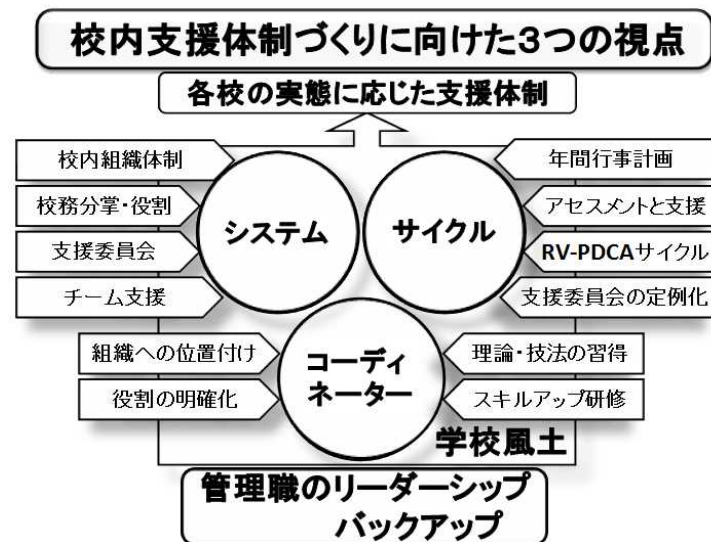
年度末は、子どもたちや保護者との信頼関係を再構築する大きなチャンスです。休んでいた子どもの中には、年度末の2～3月にかけて、再び登校を始めたり、学校に来る日数が増える子どもたちがいます。その子どもたちについては、学校に来ている時のかかわりを大切にします。学校を完全に休んでいる児童生徒には、継続的な家庭訪問や保護者面接等のかかわりの中で、本年度のがんばりを一緒にふりかえることが大切です。自己肯定感が下がっている子どもが多いので、小さなことでもがんばったことを認め、励ましていきます。

教育支援センター（適応指導教室）がかかわっているケースについては、教育支援センターも参加してのふりかえりをします。子どもや保護者の現状や願いを受けて、年度末から春季休業中の支援の仕方、始業式から始める年度初めの受け入れについて確認していくことが必要です。この年度末から春休みにかけての取組が大きなチャンスになります。

##### (2) 学校での取組、一年間のふりかえりを

まず、3月末までにしておくことは、本年度の取組の成果と課題を正確にふりかえることです。また心の教育センターが作成した『校内支援体制づくりに向けた3つの視点』を参考にしてください（資料1）。学校の規模や実態に応じた支援体制をつくるのが大切です。この図は、管理職のリーダーシップやバックアップをもとに、システム・サイクル・コーディネーター（校内支援体制を推進するリーダー）の3つの輪がうまく回転し、子どもへの援助が進んでいるイメージを表わしています。

(資料1)



## ふりかえりのポイント

- ① 教職員一人ひとりの児童生徒・学級集団に対する理解力の向上
  - 児童生徒・学級集団の理解にかかわる研修・職員会等での共通理解
  - Q-Uの活用状況（集計結果の分析・考察からの取組）
    - ・プロット図の4群に位置する児童生徒の状況と推移（満足群・非承認群・侵害認知行為群・不満足群〔要支援群〕）
    - ・学校生活意欲の状況
- ② 予防の取組
  - 人間関係づくり・ソーシャルスキルの獲得
  - 楽しく分かる授業づくり
- ③ 不登校・不登校傾向にある児童生徒の現状
  - 欠席日数・欠席状況
  - 支援状況（家庭訪問・別室登校の支援等）
- ④ 校内支援体制やチーム支援体制の現状
  - 校内支援委員会の設置と早期発見・早期対応の体制づくり
  - 支援のシステムと年間の支援サイクル
  - 具体的なチーム支援
 

不登校状態にある子どもをチームで支援するためには、まずその子の状態を見立てる（アセスメント）とともに、支援の方向性を一致させ、具体的な対応をしていく援助チームを編成することが大切になってきます。その役割を担うのが、校内支援委員会（コーディネーション委員会）です。担任を支援する体制が機能している学校では、校内組織に位置づけられ、生徒支援委員会、生徒指導委員会、教育相談委員会等と呼ばれ、定期的開催されています。

不登校の子の担任する教師を支援するポイントは、支援の中心となるのは担任や学年ですが、見立てや対応を担当・学年まかせにしないということです。
- ⑤ 校内外での連携の現状
  - 養護教諭・スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカー
  - 各市町村の教育支援センター（適応指導教室）等の相談機関
  - 心の教育センター・児童相談所・保健所等の相談機関



#### 2 来年度の不登校予防・支援のための年間計画の作成を

ふりかえりができたら、不登校予防・支援のための年間計画を作成し、教育計画に位置づけます。

### <異動関係>

杉本 順 先生 (SSW)      橋本 雅代 先生 (研究員)



2人の先生方には、スクールソーシャルワーカー並びに研究員として、児童・生徒、保護者、学校を中心に相談業務等や教育課題の調査・研究、授業支援等に携わって頂きました。杉本先生は今年度末をもって退職、橋本先生は現場（清水中）に復帰されることになりました。長い間本当にご苦労様でした。